

イエズス会総長アルトゥロ・ソーサ神父講演

「世界におけるイエズス会高等教育」

2019年7月31日 上智大学6号館101教室

現代世界において、大学の果たすべき役割はたいへん重要なものです。ここ上智大学の共同体－役員やリーダー、教授、学生、その他ミッションに関わる協働者の方々－にとっても、イエズス会の伝統においてそれが何を意味するのかを絶えず振り返ることは、特に重要なことです。それは単なる形容詞を超えるものでなければなりません。さもなければ、「イエズス会」という名前はただの贅沢なブランド名（グッチとかそのようなものの一つ）と同じで、その実体は失われてしまいます。

このことを念頭において、今回の講演では3つのテーマについて触れていきたいと思います。まず、今日におけるイエズス会大学のあり方について、次に、いわゆる「知的使徒職」について。最後に、イエズス会大学の特徴ともいえる社会との関わりについてです。

1) 今日におけるイエズス会大学のあり方について

2006年6月10日にカリフォルニアのサンタ・クララ大学で、コルベンバッハ神父(当時はイエズス会総長)が述べた「イエズス会大学の真価は、学生たちがどのような人間になるのか、にかかっている」という言葉を、私たちは忘れてはなりません。

昨年(2018年)7月にスペインのロヨラにイエズス会大学の代表者たちが集まった際に、私は挨拶のなかで、コルベンバッハ神父の次の言葉を紹介しました。「私たちが願うのは、イエズス会大学の卒業生たちが有している、人としての資質が評価されることです。激しい競争を生き抜くための能力ばかりが注目を集めるようであってはなりません。(中略)私たちは、自分自身だけではなく、他者や、全人類が生きる地球に対しても責任を果たす信念を持った教育を探求すべきです」

それゆえに、第一の指標として見るべきは、上智大学の卒業生の皆さんです。皆さんが、ベドロ・アルベ神父の「他者のために」という言葉、たとえそれが時に使い古された表現と見なされ、理解を得られないとしても、その言葉の通り生きているかどうか。もしそれが実現できているのであれば、上智大学は成功していると言えるでしょう。

第2の指標は、ひとつの現実の共同体としての大学の方向性と自己理解に関わることです。理想的に言えば、21世紀のイエズス会大学は、「和解を生きる生き方の源泉」として自らを認識することです。イエズス会は、すべての人が、現在もそしてこれからも尊厳に満ちた人生を歩んでいくことができるように、絶えず効果的に貢献していくことにコミットしていきます。イエズス会大学もその一翼を担っているのです。このことを念頭において、大学はその組織や能力、ネットワークを通じて、このミッションを現実化していくのです。

これは、聖イグナチオの霊操から導き出されるもので、特に「受肉についての観想」と関わっています(『霊操』P. 101～109参照)。その観想においては、唯一の三位一体の神の愛とともにこの世界と歴史を見つめます。その観想を行うと、私たちは数百万の人々の叫びに心を動かさざるを得なくなります。よりよい生活状況を探し求める移民、暴力の犠牲者、正義を求め貧困に苦しむ人々、肌の色や表明する信仰によって差別される人々、公民としての生活に民主的に参加する権利が否定された人々の叫びです。そうした叫びは、政治権力が私利私欲のために行使され、また、共通善や環境の保護に無関心な人々によって独占されるからです。聖イグナチオの観想においては、愛のまなざしでこの世界に目をそそぎ、この世界に私たちすべてと同じ人間となられたイエスを派遣し、救いと自由への道を示すのです。

この視点からすると、私たちのリサーチの仕事には、物事の見方そのものが大きなチャレンジを受けることになります。それは、人間的な生活を豊かにするための徹底した現実を探求するのです。私たちの学問には明確な意向があります。人間的な社会とその問題の分析に関わる者にとって、それは、不正義と不公正の根を見つけ出し、理解しようとする仕事に、そして経済的、社会的な変革のための実行可能な選択肢を提供する仕事に、不可避免的に導きます。この視点はまた、私たちが教室で教えるときの教育的なチャレンジにもなります。そして、私たちはいつも自分自身に問いかけるのです。人間的な生活の価値を伝えることができるのか、またどのようにして、という問いです。このような物事の見方、そして現実と向き合い、自分自身の立ち位置を見出したとき、私たちは「貧しい者への優先的選択」へと動かされ、それによって大学は、充実した生活を生み出す社会変革のプロジェクトになるのです。

イエズス会は、福音から得て、福音によって鼓舞されたミッション、文化と宗教の対話を通して、社会正義と持続可能な環境を決定的に促進するというミッションを実行するために、大学に驚くほどの場を見出してきました。大学は、知識の創造のプロセスを進め、知識とともに、和解と平和に満ちた生活を伝えるという人間的な教育のプロセスをともに歩むのです。

このすべてに加えて、私は、イエズス会の高等教育は政治的養成を含むべきであることを述べておきたいと思います。これは、世界市民を養成することを意味し、彼らは、世界、地球、人間的な生活そのものを大切に、責任を有しているというセンスを持つのです。イエズス会の教育機関で学び、働く者たちが、個人主義的で、彼らの究極の関心事が自分自身の利益や自己保存であるならば、それは何か大きな間違いが

起こってしまっているのです。

このような生活に向かう方向づけは、イエズス会教育の人文主義的な特徴にルーツを持つということを、私たちは認識しなくてはなりません。大学におけるイエズス会の伝統とは、個々を尊重し、それぞれがたどるさまざまなプロセスに価値を見出して支援すると同時に、彼らが自身の枠組みを超えて世界市民の一員としての責任を果たし、自己を超えていくことに開かれていくための手助けをすることです。

2) イエズス会のいわゆる「知的使徒職」について

今一度、2001年にコルベンバツハ神父が語った、今日にも通ずる言葉を振り返りたいと思います。「イエズス会は知的使徒職を会のミッションのラインに沿って、最も高い重要性を持つものと、今もなお考えています。グローバル化と多様化が進む世界において、すべてのコンテキストに有効な普遍的規範をイエズス会は与えてくれるであろうと期待することはできません。私たちの根源的な規範とは、より大いなる神への奉仕と霊魂の善であり、聖イグナチオの賢い原則である『時、場所、人に適応する』ことです」

しかし、コルベンバツハ神父はまた、「イエズス会員のすべてが知的使徒職に招かれているわけではないが、会員一人ひとりは、司牧的な分野や社会的な分野も含めて、自分が従事するいかなる分野においても有能で真剣な仕事に招かれています」と指摘しています。この意味で、知的使徒職は、単にひとつの使徒的な領域ではなく、イエズス会のカリスマの特徴であり、すべてのイエズス会使徒職において示されなければならない、私たちに固有の進め方なのです。

知的使徒職のゴールは「知恵」を探求することです。イエズス会によって運営される大学の研究機関にとって、知的深みに達すること、知識を発展させること、すべての人類の教育の要素としてそれを伝えることだけでは不十分です。真のチャレンジは、それが「使徒職」であるということです。つまり、福音のよき知らせをより効果的に宣べ伝え、この世界において神が現存し、歴史のうちに聖霊が働いていることを理解するように学び、そして、その働きにあずかり、人間の解放のために貢献するということです。

知恵は、私たちの間に現存する「賢い人々」において具体化したものを通じて存在するようになります。知恵は単なる知識の積み重ね、例えば、脳や書籍、バーチャルメモリ、図書館や大型サーバーに蓄えられているようなものではありません。知恵は、人間的・情緒的・知的成熟の段階において、すべての人々によって認識されるのであり、それは、日常的な私たちの周りにあるものを越えて、また私たち自身のうちに、出会うことを可能にします。賢い人々とは、愛を問うことに、歴史と創造のうちに見出されることを望む知恵を探求することにあるのです。

それゆえに、イエズス会の責任のもとにある大学は、創造することに招かれています。この創造的な能力は、とりわけ、時代の課題を予想することができ、何歩か先を進んでいることに示されます。大学は現在を越えて見ることができなければなりません。なぜなら、大学は、歴史的な記憶を鼓舞し、輝かせるための糧を耕し、見出すからです。

3) 社会的な関わりのコンテキストにおけるイエズス会大学の優先事項

私たちの時代は、世俗主義と宗教、イデオロギー的な原理主義との間の緊張によって特徴づけられています。その中で、大学におけるカトリックのプレゼンスは新しい意味を持っています。

大学は多様な環境であり、その中で対話と歴史的・個人的・知的プロセスの深みのある理解が生み出されます。それは人間的な自由を行使するための特権的な場です。リサーチと教えによって社会的な変容の道を探し見出す自由です。それは、福音のよき知らせである解放のメッセージが、多くの人々の日々の生活を押しつぶすかのように見える困難さと不確実性の真っ只中にあっても、生命を生みだすためのよりよい方法を見出し、そこに入っていける希望の場を見出すことに貢献するのです。

世俗世界は新しい機会を与えてくれる場であり、私たちは、私たちのカリスマのすべての次元を生きます。

私たちは、協働者として大学と学部の中にあり、私たちのアイデンティティの一部をなしているのです。私たちは、高等教育の複雑さに気づいています。しかし、私たちは、多くの人々と責任を分かち合う複雑なミッションの協働者と考えているのです。

以上、私の考えていることを懸念も含め申し上げました。この度の上智大学の講演に際し、あたたかく迎え入れてくださったことに感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。